<オープン・リサーチ・センター公開講演会>

■「ギリシア」後のギリシア～帝国支配下のアテネ～

講師　京都女子大学文学部准教授　桑山　由文　氏
立命館大学文学部准教授　小林　　功　氏

2010年12月4日（土）15：00～17：30　東北学院大学土樋キャンパス8号館5階押川記念ホール

『ギリシア』と言えば、神話は勿論、世界史では紀元前３～１世紀のヘレニズム文化などもお馴染みでしょう。

この公開講演は、そのような一般的に史実として語られている『ギリシア』以降のギリシアは一体どういう変遷を辿ったのか？　というものでした。

個人的にギリシア史に対してもっと勉強したいというのと、そもそも“「ギリシア」後のギリシア”とは何ぞや？　と思うところもあったので今回のイベントに参加させて頂きました。

当日は枯葉が舞うどころか吹き荒び強風警報も出るほどの天候で、新幹線も運転を見合わせ講師の先生の到着が遅れるというトラブルが。

順序は変わってしまいましたが、後半に講演予定であった小林先生が導入部分の説明も兼ねて講演を始めることに。

小林先生は中世以降のアテネについて、桑山先生はローマ帝国時代のアテネについてお話をして下さいました。

今回の講演における『ギリシア』後のギリシアとは、ポリスが隆盛しパルテノン神殿が建設されたりといった所謂“黄金時代”以降、他国に征服され属州となって以降のことだったのです。

お二人の先生方によると、現在の観光名所となっているようなギリシア文化圏は、「ローマの要素がとても強いギリシア（桑山先生）」「ビザンツの理想と古典ギリシアの理想が混在している（小林先生）」ものだそうです。

アテネをギリシア文化圏の中心地として復興させようとした歴史上の偉人達は、「自らの憧れの具現化」として「古代ギリシア」を描きギリシア的な復興を望んでいたけれども、それは「ローマ風ギリシア」と融合し、結果それは「ギリシアとローマのあいのこ」のようなものになってしまった…と。

自分はもっぱら図版を読み漁るような、海外なぞつい行ったこともないような輩なのですが、参加者の中にはどうやら実際に現地を見てこられた方も多く居るようで、思い思いに考えを巡らせているように見えました。

ですが、事前に用意して下さっていたレジュメを見ながらの講演だったのと、講師の先生方が面白可笑しく話して下さったので、難しいテーマかと思えた講演は余り構えずに自然に聴くことが出来ました。

参加者の多くはご年配の方々だったのですが、先生方のお話に笑いを溢したり、一緒に参加されているのであろう方と意見を交わしたりといった様子が見られ、静かではありましたが始終どこか和やかな雰囲氣でした。

高校以来の世界史だったのですが、大筋を含め専門家の口から様々なお話が聞けてとても良い機会になったと思います。

社会人になっても勉強する機会が得られるというのは幸せなことですね。

もし現地に行けるような機会に恵まれたら、今回の講演を思い出して独りごちようと思います。

（仙台市泉区　佐伯悟）

読者の皆様が参加された「学びイベント」の感想やレポートをお待ちしています。

粗品進呈

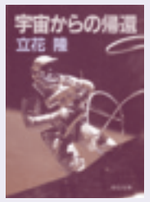
参加体験記　募集中！

「参加体験記」

◎投稿先「まなびのめ」編集部
はがき・FAX・E-mailにて受付
Webからも応募できます。
◎採用させていただいた方に
粗品を進呈いたします。

第12回

名著への旅



『宇宙からの帰還』
立花　隆 著
中公文庫

（1985年7月10日　初版発行）

日本人最長163日間の宇宙滞在記録を残した野口聡一氏が、高校時代に読んで宇宙飛行士になる決意を固めたというのが本書である。

この本の最大の眼目は、「帰還」を果たした宇宙飛行士たちの宇宙体験について、その内面的精神的認識に焦点を当て、まとまった聞き書きという形で大衆の面前に引き出した点であり、世界でも初めての試みであった。

宇宙空間から地球を眺め、月に降り立つという経験を持つほんのひと握りの人間たちが、その時何を思い、どのようなインパクトを感じ、「帰還」後の人生をどのように歩んだか。宇宙飛行士たちの語る人間、宇宙、神、存在、生物と進化などについての言葉は興味と重みに充ちているが、「帰還」後の心のあり方は一様ではない。その内面のドラマを12人の元宇宙飛行士に取材している。

冒頭からの序論部は、地球、宇宙、ロケット打ち上げ、月世界についての必要かつ十分の入門書であり、また、結末部にある人類や地球の本質と未来、多様性や環境に関するシュワイカート（アポロ9号乗組員）の言葉は、熟読玩味すべき示唆に富む啓発の書ともなっている。

（曜）

懸賞　まなびのめクイズ応募方法

はがき、FAX、E-mailのいずれかで、
①住所②氏名③年齢④職業⑤電話番号⑥クイズの答え２つ
⑦内容についての感想を添えて編集部（下記参照）までご応募下さい。
お寄せ頂いたご感想は匿名にて紙版・Web版に掲載させて頂くことがございます。
正解者の中から抽選で3名様に図書カード1000円分をプレゼント
※当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。
※応募いただいたお客様の個人情報は弊社主催のイベント案内、連絡及び発送に限り利用させていただきます。
【応募締切】2011年2月28日 当日消印有効
クイズの正解は締切後、Web版に掲載します。
※応募にはQ1とQ2両方の答えが必要です。ご注意下さい。

学びの庭におじゃまします　次号テーマ：「給食」
2011年4月5日発行予定

「気」になる「氣」…当社は言葉を組版する職業として、漢字の本来の成り立ちである「本字」を大切にしたいという思いがあり、社名に使われる本字の「氣」を使用することでその思いを表しています。

応募先／問い合わせ先
〒984-0011　仙台市若林区六丁の目西町8番45号
笹氣出版印刷株式会社内「まなびのめ」編集部
FAX 022-288-5551
TEL 022-288-5555
（FAXは24時間受付　電話受付時間10:00～16:00 土・日・祝日除く）
manabinome@sasappa.co.jp

学術の世界と市民をつなぐ情報誌「まなびのめ」第11号／発行日2011年1月5日
企画・編集　笹氣出版印刷株式会社「まなびのめ」編集部／発行　笹氣出版印刷株式会社
〒984-0011　仙台市若林区六丁の目西町8番45号
Tel　022-288-5555／Fax　022-288-5551
E-mail : manabinome@sasappa.co.jp　／　Web版 : http://www.manabinome.com

まなびのめ 編集部
只野俊裕　佐藤曜　川又進　笹氣義幸　遠藤洋子　菅野保広　伊藤秀平　齋藤麻実
菅野耕平　三上志穂　　オブザーバー：寺田征也(東北大学大学院)

協力　株式会社市瀬　有限会社岡部正志製本

この印刷物はグリーン基準に適合した印刷資材を使用して、グリーンプリンティング認定工場が印刷した環境配慮商品です。
用紙は適切に育まれた森から生まれたFSC認証紙を使用し、インキは環境にやさしい植物油インキを使用しています。

GREEN PRINTING JFPI P-B10004　FSC MIX Paper from responsible sources FSC™ C005944　VEGETABLE OIL INK　UD FONT

FREE ¥0　ご自由にお持ち帰り下さい。

学術の世界と市民をつなぐ情報誌

まなびのめ

学びの庭におじゃまします　**都市×デザイン**

杜の都の温暖化は、東京の1.5倍の速さで進んでいます

東北文化学園大学　科学技術学部　教授
（都市環境／設備工学）
須藤　　諭 先生

市民の美意識が向上すれば、都市はもっと楽しくなる

宮城大学　事業構想学部　准教授
（文化環境デザイン／色彩論）
伊藤　真市 先生

〈行ってみよう！「学び」の場所へ〉
- これからの主な「学び」イベント32件掲載！
- 「学び」イベントに行ってきました
- 名著への旅　『宇宙からの帰還』(立花　隆)

図書カード懸賞付クイズあります

季刊誌　第11号　2011.1

Web版は随時更新中！
まなびのめ　検索
http://www.manabinome.com

これからの主な
「学び」イベント

有料　無料　要申込　申込不要
▲このマークはイベント参加についての有料・無料または事前申込の有無について記しています。

ここに掲載する情報は、各研究・教育機関や施設が公開している情報を基に掲載していますので、当社の責任で開催を保証するものではありません。日時、内容に変更がある可能性がありますので、詳しくは各問合先へご確認下さい。

有料・要申込の場合の料金や申込方法など詳細はWeb版に掲載しております。ぜひご覧下さい。

定期開催

トワイライトサロン「MA☆（マスター）土佐誠の宇宙が身近になる話」　毎週土曜日 17:00▶17:45　無料　申込不要
講　師　土佐　誠（仙台市天文台長）
場所　仙台市天文台　オープンスペース　他
主催者　仙台市天文台　問合先 TEL 022-391-1300
URL　http://www.sendai-astro.jp/

1 JAN

市民公開講座「宮城の音風景・北上川河口のヨシ原のこれからを考えましょう」　1月14日(金) 17:30▶19:00　無料　申込不要
講　師　山田　一裕（東北工業大学工学部環境情報工学科教授）
場所　東北工業大学一番町ロビー　4階ホール　定員 60名
主催者　東北工業大学　問合先 TEL 022-723-0538
URL　http://www.tohtech.ac.jp/

東北大学学友会文化部講演会「鳥の群れの交通渋滞」　1月20日(木) 18:00▶19:30　無料　申込不要
講　師　早川　美徳（東北大学教育情報基盤センター教授　邦楽部部長）
場所　東北大学川内キャンパス　マルチメディアホール
主催者　東北大学学友会文化部
URL　http://www.tohoku.ac.jp/

シンポジウム「脳科学と芸術との対話」　1月21日(金) 18:00▶19:45　無料　要申込
講　師　セミール・ゼキ（ロンドン大学教授）他
場所　仙台市民会館　小ホール　定員 250名
主催者　東北大学脳科学グローバル COE　問合先 TEL 022-717-7903
URL　http://ja.sendaibrain.org/topicsDetails/symposium20110121/

第17回東北大学高等教育国際セミナー「植民地時代の文化と教育―韓国併合1世紀を経て―」　1月22日(土) 13:00▶17:30　無料　申込不要
講　師　稲葉　継雄（九州大学大学院人間環境学研究院教授　韓国研究センター長）他
場所　東北大学川内北キャンパス　教育・学生支援部管理棟3階　大会議室
主催者　東北大学高等教育開発推進センター　問合先 TEL 022-795-3371
URL　https://www3.he.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1291180303

民俗芸能講座「鹿踊・剣舞（1）」　1月22日(土) 13:30▶15:00　無料　要申込
場所　東北歴史博物館　研修室　定員 100名
主催者　東北歴史博物館　問合先 TEL 022-368-0106
URL　http://www.thm.pref.miyagi.jp/

第2回縄文講座「すごいぞ縄文人～ノーベル賞級の発明品の数々」　1月23日(日) 13:30▶15:00　無料　申込不要
講　師　會田　容弘（郡山女子大学短期大学部准教授）
場所　仙台市縄文の森広場　定員 100名
主催者　仙台市縄文の森広場　問合先 TEL 022-307-5665
URL　http://www.city.sendai.jp/kyouiku/jyoumon/

企画展「地底の森ミュージアム 2010」　1月25日(火)～3月21日(月) 9:00▶16:45　有料　申込不要
場所　地底の森ミュージアム　企画展示室
主催者　地底の森ミュージアム　問合先 TEL 022-246-9153
URL　http://www.city.sendai.jp/kyouiku/chiteinomori/

東北大学サイエンスカフェ　第67回：核融合のお話―宇宙創成からエネルギー資源の未来まで―　1月28日(金) 18:00▶19:45　無料　申込不要
講　師　笹尾　眞實子（東北大学大学院工学研究科教授）
場所　せんだいメディアテーク　1階オープンスクエア
主催者　東北大学　問合先 TEL 022-217-4977
URL　http://cafe.tohoku.ac.jp/event/no67/

※登場者（講師、演者、担当者）については敬称略

学びの庭におじゃまします

現在私たちは、どの市町村であれ、様々な社会的生活基盤が整備された「都市生活」を送っていると言えましょう。「都市」や「都市生活」「生活環境」のデザインはとても多岐にわたって行われていると考えられますが、まずは「都市環境」「設備工学」がご専門の須藤諭先生に、環境の側面からお話をお聴きしました。

杜の都の温暖化は、東京の1.5倍の速さで進んでいます

懸賞 図書カードを当てよう！ まなびめめクイズ

正解者の中から抽選で3名様に図書カード1000円分をプレゼント

Q.1 下水の水温は、年間を通しておよそ何℃前後？

※応募にはQ1とQ2両方の答えが必要です。伊藤真市先生の記事もご覧下さい。

応募方法 はがき、FAX、E-mailのいずれかで、①住所、②氏名、③年齢、④職業、⑤電話番号、⑥クイズの答え2つ、⑦内容についての感想を添えて編集部までご応募下さい。 【応募締切】2011年2月28日 当日消印有効

※当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。
※応募いただいたお客様の個人情報は弊社主催のイベント案内、連絡及び発送に限り利用させていただきます。

建築学者が地球環境のことを考える理由

私は建築学の中の、建築物を取り巻く環境と、そのデザインについての研究をしています。建物自体をデザインしたり都市の景観をデザインしたりするのと違って、「環境をデザインする」というのは、一般の方にはちょっと分かりにくいかもしれませんね。私も大学に入るまでは、建築というのは建物そのものを造ることだと思っていました。ところが勉強するうちに、「環境工学」という分野に興味を持ち始めたのです。建物の中で快適に暮らしたり、働いたりするための環境を整えるための研究で、20世紀の半ばにこの言葉が生まれました。環境調整を行う装置として電氣、空調、給排水等の建築設備を研究対象とする「設備工学」も含まれています。建物の形を設計したり、それを実現するための構造を考えたりすることに比べると地味に思われるかもしれませんが、建物を使う人間を主体に考えれば、非常に大切な分野だということがお分かりいただけると思います。

私が大学で学んだ頃、それまで主に建築環境を研究対象としてきた環境工学の中に「都市環境」という研究分野が新しく生まれてきました。実は建物の空調は、中を冷やす時には外、つまり都市や地球を温めています。これからは建物の中だけでなく、建物の外の環境のことを考えなければならない、という思いから「都市環境」という新たな学問を提唱し、日本に定着させたのは、私の恩師である尾島俊雄先生です。先生は、都市が異常に暑くなる「ヒートアイランド現象」や「地球温暖化」といった環境問題に、建築学の立場から挑まれた先駆けでした。

冷暖房は、集約した設備を用いて、個々の部屋よりも建物全体、個々の建物よりも地域全体で行う方が効率的です。負荷、つまり環境へのマイナスの影響を減らすだけでなく、省エネルギーになることからランニング・コストを削減することもできます。尾島先生は1970年の大阪万博で、この「地域冷暖房」を日本で初めて設計しました。当時の日本は高度成長期です。3年後の石油危機でようやく「エネルギーの節約」という発想が広まりますが、私が大学で学んだ1970年代後半でも、「都市環境は10年、20年先の学問領域」とまだ言われたものです。

今では大規模な建築物を建てる際は、環境への負荷を予測するだけでなく、建物が寿命を迎えて取り壊す際の廃棄物の処理方法までを考えてプロジェクトをスタートさせることが常識になりつつあります。建設時のイニシャル・コストに加えてランニング・コストが重視されるようになり、修繕や建て替え、設備の更新が大きな課題になっている現代において、こうした「都市環境」や「地球環境」への影響を研究する分野は、ますます重要な役割を果たすはずです。

建物のエネルギー消費量を減らすには

「デザイン」には本来「計画する」という意味もあり、都市にはデザインが不可欠です。どこにどんな建物を建てるか、その外観をどうするか、ということも大切ですが、より快適で活氣のある街を作るためには、大きく環境全体に目を向ける必要があります。

例えば都市の暑さの問題を考えてみましょう。氣象学でも都市の数ヶ所で氣温や湿度を計測しますが、「都市環境」では観測地点を250mとか500mおきに設けます。「ヒートアイランド現象」が単なる感覚の問題ではなく実際に起きていること、コンクリートやガラスといった乾いた材料で地面や水面を塞いだ地域、高い建物が密集して風が通りにくい地域ではより暑さが厳しいことを、1970から1980年代に明らかにしました。

この「ヒートアイランド現象」はヨーロッパの諸都市でも観測されていましたが、高緯度で冬の寒さが厳しい街が多いことから、大きな問題とは考えられていませんでした。しかし東京をはじめとする日本の都市では事情が違い、夏の蒸し暑さがこれ以上厳しくなったら大問題です。そこで地面や水面を甦らせたり、ビルを建てる時は周囲に空き地を作ったりなどの対策をとり始めたわけです。しかし統計によれば、仙台の都市温暖化は東京のおよそ1.5倍の速さで進行中です。建物の中は快適かもしれませんが、外の環境は悪化し続けているのです。

都市全体では、中心部に公園や緑地を増やしたり、建物の過密が起こらないよう規制したりするなどして対処することになります。一方で個々の建物、特に人が多く集まる規模の大きな建物については、そのエネルギー消費量を測定して比較・評価し、環境負荷を減らすよう努めなければなりません。

建物のエネルギー消費量は、MJ/㎡（メガジュール毎平方メートル）という単位を使って比較します。私たち「東北都市環境研究グループ」が2000年頃に実施した調査結果の中から、一部を紹介しましょう。東北6県の県庁所在地にある143の事務所の、年間エネルギー消費量の平均値は2,000 MJ/㎡弱です。これに対して自治体の庁舎は1,000から1,500 MJ/㎡の間で、省エネに率先して取り組んでいることが分かります。一方、スーパーでは4,000 MJ/㎡弱、百貨店では3,000 MJ/㎡強で、店舗施設が多くのエネルギーを使っていることが分かります。

建物の省エネルギーのための方策はいくつかあって、冷暖房の設定温度に氣を配ることはその基本です。冷暖房の効率を大きく上げるためには、たとえば窓ガラスを2枚以上の複層にするなどの断熱化が非常に有効ですが、実施しているのは、まだ調査対象の2割以下でした。

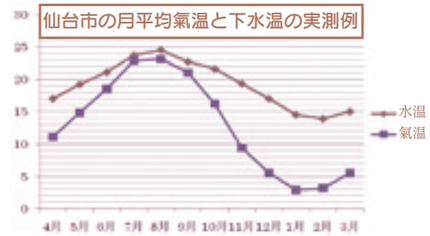
「やめるデザイン」「拾うデザイン」で温暖化を防止する

私自身は主に省エネルギーシステムについて研究しています。今でも比較的容易に導入できるものとしては、LEDに代表される高効率照明への取り替えや、照明自動点滅方式の採用があります。また規模の大きな病院やホテルなどの施設では、自家発電を行って、その際に出る熱を暖房や給湯に用いる「コージェネレーション」システム等が考えられます。

私が「未利用エネルギー」として注目しているのは、下水の熱です。あまり知られていませんが、下水の温度は年間を通してほぼ20℃前後で安定しています。家庭でも、台所や浴室で熱した水をたくさん下水管に流していますよね。これがたいへん有望な熱源で、個々の家庭で下水熱を利用するのは残念ながら困難ですが、集めれば大きな熱エネルギーが得られるのです。

仙台港の近くにある「仙台市南蒲生浄化センター」は東北最大規模で、仙台で排出される下水のおよそ80%が集められます。処理した後は太平洋に流していますが、これを熱源として、周辺の大規模な諸施設にエネルギーを供給すれば、仙台は省エネルギーの先進都市となるためのステップになるはずです。

仙台市の月平均氣温と下水温の実測例



私は杜の都というキャッチフレーズを素晴らしいと思う一方で、仙台にはまだまだ緑がたりないと考えています。私が仙台に住み始めてからの18年間にも、仙台の都市温暖化は急速に進んでいます。これは日本ばかりかアジア諸都市共通の問題となっていることから、昨年の11月には「アジアにおける持続可能な都市環境デザイン」をテーマに仙台で国際会議が開催され、私は大会実行委員長を務めました。オープニングには市民公開シンポジウムも行い、仙台市長にもご参加いただきました。

「省エネルギー」とか「持続可能な」という言葉だけを聞くと、「我慢しなければ」など後ろ向きなイメージを持つ方もいらっしゃるかもしれません。しかし涼しく爽やかな風が中心部を吹き抜ける都市を作ったり、化石エネルギーの消費を抑えたりしながら快適に過ごせる屋内空間を実現することは、決して不可能なことではないのです。

そのためには、どんな建物を建てるかだけでなく「建物を建てない」という選択肢を考えることや、太陽光、風力に代表される、化石エネルギー以外の多くの「未利用エネルギー」を活用することも大切です。これらを私は「やめるデザイン」「拾うデザイン」と呼んでいます。

市街地を流れる広瀬川の存在をもっと活かすことや、屋上・壁面の緑化を進めることも、仙台を名実共に「杜の都」にすることにつながるでしょう。これはもちろん、行政や企業だけでなく、私たち市民の選択や暮らし方の問題でもあります。環境問題に興味を持っていただき、こうした「都市環境」や「設備工学」についても学んでいただけたらうれしいですし、大学で専攻する若者も、もっと増えてくれるようにと願っています。

（取材＝2010年11月11日／東北文化学園大学1号館3階・須藤研究室にて）

東北文化学園大学　科学技術学部／大学院健康社会システム研究科　教授
専攻　都市環境／設備工学

須藤　諭 先生

《プロフィール》
（すどう・さとし）1958年東京都生まれ。早稲田大学理工学部卒業。早稲田大学大学院理工学研究科 博士後期課程 単位取得満期退学。工学博士。東北科学技術短期大学助教授、東北文化学園大学助教授を経て、2004年より現職。

学びの庭におじゃまします

豊かな暮らし、豊かな街、というと、経済的なことだけの問題ではないと思われます。
文化環境デザイン、色彩論を専攻される伊藤真市先生のお話をうかがい、いろいろと考えてみましょう。
暮らしを潤す一工夫につながる氣づきが得られるかもしれません。

市民の美意識が向上すれば、都市はもっと楽しくなる

現地で見なければ分からない民俗芸能がある

近代社会が成立して、私たちの生活は格段に便利になりました。機能性と効率性が追求された結果、日本中だけでなく世界中で規格の統一が進み、どこへ行っても同じデザインの店舗で、同じデザインの商品が手に入る時代になったのです。

しかし、地域性が完全に失われてしまったわけではありません。むしろ今は、その地域にしかないもの、古くから伝わるものの価値を再発見して大切にしようという考えが広まりつつあります。それは形があるものだけとは限りません。味、音楽、言葉、あるいは歴史や伝承など、さまざまな地域文化を保存して、観光などに活かすようになったのです。

たとえば地域に伝わる民俗芸能を集めて、大きなホールで演じてもらったとします。もちろん大ホールでも成り立つものもあるでしょう。しかし森にある神社の境内など、現地で見なければ分からないもの、現地で演じられなければ本質が伝わらないものもあります。神事としての芸能には宗教的な空間の構成が必要ですから、最新の音響・照明設備のあるステージよりも、その地域で演じられた方が価値が高いことがあり得るわけです。

こう考えると、芸能そのものにとどまらず、演じられる「文化的環境」も大切だということが分かります。しかし当の地域住民にとってそうした環境は、当たり前すぎたり、古くて時代遅れに感じられたりしていることも少なくありません。私の専門である「文化環境デザイン」とは、こうした地域特有の個性を見出し、デザインしようとする学問分野です。

デザインという言葉が表す領域はたいへん広く、こうした説明だけでは分かりにくいかもしれません。デザインも美術も、視覚的な価値を創り出します。ですから新しい図案を考えたり模様で飾ったりする「表現としてのデザイン」は、比較的イメージしやすいでしょう。服、車、室内、大きくは建築物などの「実用性を踏まえたデザイン」も考えやすいかもしれません。

しかしデザインという言葉は、本来「計画・立案・設計」という意味です。この広い意味で考えれば、「ライフデザイン」であるとか「キャリアデザイン」といった、視覚以外の分野のデザインがあることがお分かりいただけるはずです。従って環境デザインとは、視覚的なものを含めて、私たちを取り巻く環境をトータルに設計し、実現を図ることだと言えます。

デザインという言葉を使っていなくても、私たちの祖先は、長い時間をかけて自分たちの暮らす里の姿を作ってきました。本来の地形を活かし、耕す場所と耕さない場所、木を切る場所と切らない場所を決めるなどして、世代を超えて現代に「環境」を伝えてきたのです。

家庭内で受け継がれて来た装飾文化を再評価

デザインで、私自身が注目している対象が大きく二つあります。一つは今例に挙げた民俗芸能と地域の関係、もう一つが家庭の中で受け継がれて来た生活文化です。

山形県鶴岡市（旧櫛引町黒川地区）に伝わる黒川能は、500年以上も地域独自に伝承されてきました。年４回、春日神社の例祭に神事として奉納されますが、もっとも重要な祭典は、２月の初めに夜を徹して行われる「王祗祭（おうぎさい）」です。「当屋」と呼ばれる、地域で一番の高齢者の家の壁を壊して能舞台を造って演じます。同じく山形県の酒田市には、農家の人々が演じる黒森歌舞伎が、200年以上も前から伝わっています。真冬に、本格的な回り舞台と共に屋外の雪の上に筵（むしろ）をひいて観客席とするため、「雪中芝居」と称されています。

このように、何が演じられるかだけでなく、誰が演じるかや、どこで演じるかが重要な意味を持つ場合、「地域のコンテキスト（文脈）に則っている」と言います。一つの文が、長い文章の中のある位置に置かれることで独特の微妙な意味を表現するように、民俗芸能もまた、その地域にしかあり得ない空間的文脈の中で独自な個性を表現しているのです。

一方おもに女性によって、それぞれの家庭で伝承されてきた文化・デザインも、これに通ずるものがあります。カーテンの刺繍などの手芸による装飾文化は、かつては世代を超えて脈々と伝承されてきました。ところが近代的な工業製品が次々と家庭に入ってきたことで、しだいに忘れられ、今やほとんど失われようとしています。

モダンデザインは、装飾を排したシンプルさが特徴です。誕生期から発展期にかけてのプロのデザイナーはほとんどが男性で、飾りが施される場合も、幾何学的なパターンなどが選ばれてきました。こうした、女性原理的な装飾文化と男性原理的なモダンデザインの対立の図式を最初に指摘したのは、英国の女性研究者ペニー・スパークです。彼女は20世紀のデザイン史を調べるうちにこの問題に氣付き、家庭で伝えられて来た装飾文化の再発見と、女性の視点によるデザイン評価とを提唱して、大きな共感を呼びました。著書の中で建築家の夫が妻に「窓にはカーテンではなくブラインド」といった話も出てきます（笑）。

単に「古いものを大切にしよう」と訴えるだけでは、地域の民俗芸能にしても、家庭内の装飾文化にしても、真価を伝えることも後世に残すこともできません。現代に合った形で、地域の外、時には国の外に向けてアピールする必要があります。そして「文化環境デザイン」の研究は、こうした活動に寄与することができるのです。

「かわいいビル」や「かわいい都市」もあって良い

都市の主役はビルや道路ではなく、そこに住み、働き、遊ぶ人間でなくてはなりません。私たちには、自分の街をデザインする権利と責任があるのです。私が所属する「公共の色彩を考える会」では、例えば公共交通の車体の色に助言を行ったり、都市景観の優れた事例を顕彰したりしてきました。しかし市民の皆さんは、「街の色」にどれだけ関心をお持ちでしょうか。街に新しく作るものの色について住民アンケートを取ると、決まって灰色系の色が上位に来ます。目立たないため、たしかにどんな街や色にも合いやすいのですが、積極的に街の個性のことも考えていただきたいと思うのです。

色を選ぶというと色相（色の種類）だけを考えがちですが、彩度（鮮やかさ）と明度（明るさ）も重要な要素です。色が何種類かあっても、彩度を抑えて揃えることで全体的な統一感をつくるという方法もあるでしょう。一方、例えば「杜の都イコール緑」だけではなく、ベースカラーの中に5%から15%ほどのアクセントカラーを組み合わせることで、個性をよりアピールすることもできます。都市にかかわらず、地域のブランド化のためにはこうした幅広い発想が必要で、これもやはり「文化環境デザイン」に他なりません。

私は、都市のデザインを行政や企業だけに任せるべきではないと思います。その街に住む市民の美意識が向上することで、都市はもっと快適で楽しくなるはずです。出窓に飾る花を、室内からだけでなく、通りからも眺めてみましょう。私は女性の感覚に、特に期待しています。女性が高く評価する「かわいいビル」や「かわいい都市」があっても良いと思います。平安文学に代表される通り、日本の女性は昔から文化的に高い感性を育んで来たのですから。

私自身は美術系大学の出身で、デザイン学科でインテリアを学びました。経済学者だった父の影響か社会科学も好きで、トータルに考え、デザインすることが性に合っているのかもしれません。大学院ではランドスケープデザインと都市計画の先生について環境デザインを学び、その後、コンセプトづくりやプレゼンテーションといった企画全般の仕事をしてきました。

今は学生の指導に力を入れていて、幅広い学生を対象とする授業では、色鉛筆を使ったワークショップが、デッサンは苦手という学生にも好評です。また自分の研究室の学生には、常に「事業化」を意識してアイディアを出し、作品づくりを進めるよう指導しています。学ぶ意欲を持った社会人が増えているそうですが、ご自分の今までのキャリアを活かしてあらためて学び直したいという方がいらっしゃれば、ぜひ宮城大学大学院の事業構想学研究科でお会いしたいと思っています。

（取材＝2010年11月2日／宮城大学大和キャンパス本部棟４階・伊藤研究室にて）

宮城大学　事業構想学部／大学院事業構想学研究科　准教授
専攻＝文化環境デザイン／色彩論

伊藤　真市 先生

《プロフィール》
（いとう・しんいち）1961年東京都生まれ。東京造形大学造形学部卒業。筑波大学大学院芸術学研究科 博士課程単位取得満期退学。学術修士（芸術学）。株式会社フジタ勤務、杉野女子大学講師、宮城大学助教授を経て、2008年より現職。

懸賞　図書カードを当てよう！ まなびめめクイズ

正解者の中から抽選で3名様に図書カード1000円分をプレゼント

Q.2　色の三属性とも呼ばれる三つの要素とは？

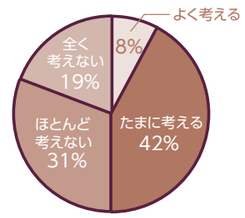
※応募にはQ1とQ2両方の答えが必要です。須藤論先生の記事もご覧下さい。

応募方法　はがき、FAX、E-mailのいずれかで、①住所、②氏名、③年齢、④職業、⑤電話番号、⑥クイズの答え２つ、⑦内容についての感想を添えて編集部までご応募下さい。　【応募締切】2011年2月28日 当日消印有効

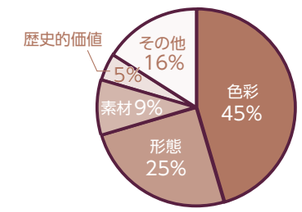
※当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。
※応募いただいたお客様の個人情報は弊社主催のイベント案内、連絡及び発送に限り利用させていただきます。

景観に関する大学生へのアンケート結果

自分の住んでいる町の景観について考えた事があるか



景観を見る際に最も重要視するポイント



※ 伊藤真希「環境色感の知育と可能性」平成21年度卒業論文より

mobile版には新イベント情報が随時更新中

右記のQRコードからアクセス下さい。

1 JAN

2010年度　日本西アジア考古学会　公開セミナー／東北大学教育関係共同利用拠点提供プログラム「西アジアにおける教育の起源と展開」
1月29日(土) 13:00▶16:55 無料 申込不要
講　師　小泉　龍人（早稲田大学）他
場所 東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟2階　マルチメディアホール（M206）
主催者 東北大学高等教育開発推進センター・日本西アジア考古学会　問合先 TEL 022-795-3371
URL https://www3.he.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1291859512

特別展関連「風邪をひいたらどうする〜薬用植物のはなし〜」
1月29日(土) 13:30▶15:00 有料 申込不要
講　師　安積　茉莉子（仙台市薬剤師会副会長）
場所 仙台市歴史民俗資料館
主催者 仙台市歴史民俗資料館　問合先 TEL 022-295-3956
URL http://www.city.sendai.jp/kyouiku/rekimin/calender/index.html#20101120

第39回東北大学農学カルチャー講座「「美味しい」東北大学—生きもの・環境・人にやさしい食のあり方を考える—」
1月31日(月) 18:00▶20:00 無料 申込不要
講　師　佐藤　衆介（東北大学大学院農学研究科教授）他
場所 エル・パーク仙台
主催者 東北大学大学院農学研究科・財団法人翠生農学振興会　問合先 TEL 022-276-1582
備考 16:00〜20:00 試食・展示

2 FEB

元気・健康セミナー「運動するカラダを知ろう〜自分らしい身体をデザインするために〜」
2月 3日(木) 10:00▶12:00 有料 要申込
講　師　河村　孝幸（東北福祉大学准教授　東北大学大学院医学系研究科非常勤講師）
場所 東北福祉大学　ステーションキャンパス館3階　問合先 TEL 022-233-2907
主催者 東北福祉大学　社会貢献センター 予防福祉健康増進推進室　仙台元気塾事務局
URL http://www.tfu-ac.net/yfkc/genki/seminar_201102.html

特別展「ニューヨーク展開催記念　型絵染の巨匠　芹沢銈介」ギャラリートーク
2月 5日(土) 13:30▶ 有料 申込不要
講　師　東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館学芸員
場所 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
主催者 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館　問合先 TEL 022-717-3318
備考 入館料：一般 300円　学生 200円

放送大学公開講演会「健口は命の源」—生きがいをもたらす健康の盲点—
2月 5日(土) 14:00▶16:00 無料 要申込
講　師　渡邉　誠（東北福祉大学教授　東北大学名誉教授）
場所 仙台市戦災復興記念館　定員 130名
主催者 放送大学宮城学習センター　問合先 TEL 022-224-0651
備考 申込み先着順・定員に達し次第締切

スペースラボ in 仙台市天文台「私たちの太陽系ができるまで」
2月 6日(日) 10:00▶12:30 無料 要申込
講　師　髙田　淑子（宮城教育大学）
場所 仙台市天文台　定員 20名（小学生高学年、中学生）
主催者 宮城教育大学・仙台市天文台　問合先 TEL 022-214-3415
URL http://rika.miyakyo-u.ac.jp/information/spacelab.html

「いま哲学とはなにか」（全5回）
2月12日(土)〜 13:00▶15:00 有料 要申込
講　師　岩田　靖夫（仙台白百合女子大学名誉教授）
場所 仙台白百合女子大学1号館144室　定員 100名（18歳以上）
主催者 仙台白百合女子大学　問合先 TEL 022-374-4475
URL http://sendai-shirayuri.ac.jp

レクチャーコンサート「時代の音」第6回
2月12日(土) 16:00▶18:00 有料 要申込
講　師　波多野　睦美（メゾ・ソプラノ）他
場所 東北学院大学　土樋キャンパス礼拝堂　定員 900名
主催者 東北学院大学　問合先 TEL 022-375-1185
URL http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/period/

東北大学リベラルアーツサロン 第9回「民族から見た中国」
2月18日(金) 18:00▶19:45 無料 申込不要
講　師　上野　稔弘（東北大学東北アジア研究センター准教授）
場所 東北大学附属図書館本館　1階メインフロア
主催者 東北大学　問合先 TEL 022-217-4977
URL http://www.cneas.tohoku.ac.jp/hplas/event_009_ut.html

※登場者（講師、演者、担当者）については敬称略

これからの主な

「学び」イベント

有料　無料　要申込　申込不要

▲このマークはイベント参加についての有料・無料または事前申込の有無について記しています。

2 FEB

楽しい化学実験室「二酸化炭素の不思議」
2月19日(土) 10:00▶11:30 無料 要申込
場所 仙台市科学館　2階　第4実験室　定員 30名（小学3年生以上）
主催者 仙台市科学館　問合先 TEL 022-276-2201
備考 締切2月1日必着

地底の森ミニ講座
2月19日(土) 11:00▶12:00 有料 要申込
講　師　地底の森ミュージアム学芸員
場所 地底の森ミュージアム　定員 10名（18歳以上）
主催者 地底の森ミュージアム　問合先 TEL 022-246-9153
備考 締切2月5日必着

サンデーサイエンス「耳石とうろこで魚の年齢を調べよう」
2月20日(日) 10:00▶11:30 無料 要申込
場所 仙台市科学館　1階　市民の理科室　定員 20名程度（中学生以上）
主催者 仙台市科学館　問合先 TEL 022-276-2201
備考 締切2月8日必着

国宝・大崎八幡宮『仙台・江戸学』第5期「仙台城下町への肴の道」
2月23日(水) 13:30▶15:00 有料 要申込
講　師　斎藤　善之（東北学院大学経営学部教授）
場所 大崎八幡宮　祭儀棟　定員 100名
主催者 「国宝大崎八幡宮　仙台・江戸学」実行委員会　問合先 TEL 022-234-3606
URL http://www.okos.co.jp/oosaki/edogaku/

東北大学サイエンスカフェ　第68回：これからのリチウムイオン電池〜電気自動車からマイクロ電池まで〜
2月25日(金) 18:00▶19:45 無料 申込不要
講　師　河村　純一（東北大学多元物質科学研究所教授）
場所 せんだいメディアテーク　1階オープンスクエア
主催者 東北大学　問合先 TEL 022-217-4977
URL http://cafe.tohoku.ac.jp/event/no68/

3 MAR

第32回　小池光　短歌講座
3月 5日(土) 13:30▶15:30 有料 要申込
講　師　小池　光（仙台文学館館長）
場所 仙台文学館　定員 80名
主催者 仙台文学館　問合先 TEL 022-271-3020
URL http://www.lit.city.sendai.jp/

公開講演会「ブルゴーニュ公国の宮廷と都市—中・近世ヨーロッパの十字路—」
3月 5日(土) 13:30▶17:00 無料 申込不要
講　師　畑　奈保美（東北学院大学オープン・リサーチ・センター・ポストドクター）他
場所 東北学院大学　土樋キャンパス8号館5階　押川記念ホール
主催者 東北学院大学　オープン・リサーチ・センター　問合先 TEL 022-264-6552
URL http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/

第24回　耳の日のイベント
3月 6日(日) 10:00▶12:00 無料 申込不要
講　師　加藤　健吾（東北大学病院耳鼻咽喉・頭頸部外科助教）他
場所 仙台市急患センター・仙台市医師会館　2階ホール
主催者 日本耳鼻咽喉科学会宮城県地方部会・宮城県耳鼻咽喉科医会　問合先 TEL 022-717-7304
備考 インターネット上でもバーチャル講演会を開催しています。

元気・健康セミナー「脱！メタボリックシンドローム〜あなたもできる！！日常生活でのコツ〜」
3月12日(土) 10:00▶12:00 有料 要申込
講　師　齋藤　昌宏（東北福祉大学特任講師）
場所 東北福祉大学　ステーションキャンパス館3階　問合先 TEL 022-233-2907
主催者 東北福祉大学　社会貢献センター　予防福祉健康増進推進室　仙台元気塾事務局
URL http://www.tfu-ac.net/yfkc/genki/seminar_201103.html

英語英文学研究所定例公開講演会「T.S. Eliot の The Waste Land 私流の読み方」
3月12日(土) 13:00▶14:30 無料 申込不要
講　師　菊地　弘（東北学院大学教養学部教授）
場所 東北学院大学　泉キャンパス2号館2階　221教室
主催者 東北学院大学　英語英文学研究所　問合先 TEL 022-264-6401
URL http://www.tohoku-gakuin.jp/

※登場者（講師、演者、担当者）については敬称略

Web版はより多くの情報を随時更新しています。

まなびのめ　検索

http://www.manabinome.com

3 MAR

東北大学サイエンスカフェ　第69回：良い洪水と悪い洪水〜カンボジアの便益とリスク〜
3月18日(金) 18:00▶19:45 無料 申込不要
講　師　風間　聡（東北大学大学院工学研究科教授）
場所 せんだいメディアテーク　1階オープンスクエア
主催者 東北大学　問合先 TEL 022-217-4977
URL http://cafe.tohoku.ac.jp/event/no69/

特別展「ポンペイ展」　講演会「ポンペイの産業と交易」
3月19日(土) 13:30▶15:00 無料 要申込
講　師　浅香　正（同志社大学名誉教授、本展総合監修）
場所 仙台市博物館ホール　定員 200名
主催者 特別展「ポンペイ展」仙台展実行委員会 他　問合先 TEL 022-215-7700
URL http://www.mmt-tv.co.jp/pompei/

国宝・大崎八幡宮『仙台・江戸学』第5期「伊能忠敬と仙台藩—伊能忠敬測量隊東北を行く—」
3月22日(火) 13:30▶15:00 有料 要申込
講　師　松宮　輝明（伊能忠敬研究会東北支部長）
場所 大崎八幡宮　祭儀棟　定員 100名
主催者 「国宝大崎八幡宮　仙台・江戸学」実行委員会　問合先 TEL 022-234-3606
URL http://www.okos.co.jp/oosaki/edogaku/

「まなびのめ」で扱う「学び」イベントとは…

学術研究者・機関（大学・文化施設等）から市民に向けた研究成果の発信である講座・セミナー等です。

掲載料は無料です。
情報提供をお待ちしております。

※当誌の趣旨に合わないと判断したものは掲載を見合わせることがございますので、あらかじめご了承下さい。

参加体験記　「学び」イベントに行ってきました

＜東北大学サイエンスカフェ＞
■「第63回：超音波で体の中を切らずに見る」
講師　東北大学大学院工学研究科／医工学研究科教授　金井　浩　氏
2010年9月24日（金）18:00〜19:45　せんだいメディアテーク　1階オープンスクエア

各テーブルにファシリテーター役の大学院の学生さんが一人ずつついてくれて、質問に答えてくれたり、超音波検査器で参加者の頸動脈を描出してくれました。

超音波プローブ（超音波を出す器械）の音源から人間の可聴音域の500倍の超音波が出て、1秒間に1万回振幅しながら体の中を通るそうです。超音波は組織や器官で反射し、戻ってきた超音波の振動は電気に変換され、その信号を明るさに変換して画像化するそうです。組織や器官の硬さがそれぞれ違うので、超音波の伝わり方の違いを測定することで動脈硬化の程度の評価や診断に役立てられ、今後は心筋梗塞の診断に活用できるよう研究しているそうです。今回体験したことが将来日常的に医療現場で使われるようになると想像でき、とても期待感が持てました。

超音波の原理は難しいんでしょうが、金井先生の解りやすい説明で自分も研究者になった氣になり、何かアイディアがないか考えてしまいました^_^　久々に学生氣分が味わえて楽しかったです♪

（仙台市太白区・女性　みっちー）

まなびのめ の色使い

襲色目（かさねのいろめ）
袷仕立て（あわせしたて）された衣服の表地と裏地の配色で平安貴族の雅な色。
四季折々の変化をその様相の比喩表現によって色彩として感じ取ってきた日本人が作り上げてきた配色法です。
第11号：「苦色（にがいろ）」（niga-iro）

＜第1回ファミリーミーティング＞
■「子ども遊びリンピック」
講師　ミュージアムパーク茨城県自然博物館主任学芸員　湯本　勝洋　氏（ゆもっち）
2010年10月23日〜24日（1泊2日）　国立那須甲子青少年自然の家
福島県西白河郡西郷村大字真船字村火6-1 TEL 0248-36-2331 FAX 0248-36-2150

幼い子供とでも参加できるので、4歳息子と那須甲子青少年自然の家でのイベントに一泊で申し込みをして、他県の家族と楽しく羽根つきや縄とびなどの遊びや虫探しに夢中になって帰って来ました。

仙台からの参加は私達親子だけでしたが、保育園に毎日通っている息子からは普段していない目の輝きとやる氣を感じ、親も日常をふっと忘れることができました。親子でなかなか息が合わず、うまくできなくてもあきらめずに練習を繰り返して筋肉痛にはなりましたが良い体感ができました。

「まなびのめ」第10号に書かれている中房先生・前田先生の文を読ませていただき今後は親子で体を動かして、次回のいい記録につなげていけたら良いなあ〜と一つ目標が増えました。

（仙台市　遠藤まり）

＜第27回操体バランス運動研究会 in 仙台　市民公開講座＞
■「操体法　—自分自身の治る力を引き出す健康メンテナンス—」
講師　木戸クリニック　須永　隆夫　氏
石岡第一病院　夏井　睦　氏　他
2010年10月30日（土）10:30〜12:30　仙台市医師会館　第1会場2F　第2会場5F各ホール

皆さんは「操体法」ご存知ですか？

人間の口や歯の形に適しているのは野菜や穀物。呼吸はゆっくり吐けば自然に大きく吸える。自分の体で痛みや違和感のある時、おかしいところ、動かしにくい方向があったら、ラクな氣持ちのよいほうへ動かしてやる。どこが悪いと嘆くより、少しでもよいところ、動くところを喜び、それを伸ばしていく。食（正しい食べ方）・息（呼吸の仕方）・動（身体の動かし方）・想（心のもち方）のバランスで健康メンテナンスをしていくとても興味深いものです。

今回の公開講座ではけが予防や再発防止のために保健室で操体法を活用されているみどり台中学校の山田教諭のお話や操体法などを身に付けた学生が「健康づくり運動サポーター」として地域全体の健康づくりに貢献し、老人とふれあう事で学生自身の人間性も磨かれて成長している等、仙台大学の活動が橋本教授より紹介されました。

なかでも、特別講演をなさいました石岡第一病院の夏井睦先生の「新しい創傷治療」「消毒とガーゼ」を用いない湿潤療法の話の中で、家庭において当り前にしていた、傷を消毒しガーゼで覆ったりする事がかえってその傷を悪化させてしまうという事実です。

そのためには「消毒をしないこととキズを乾かさないこと」です。

キズを消毒したり乾かしたりするとキズを治そうと頑張っている細胞がバイ菌より先に死んでしまって逆効果になるのです。

ケガをした瞬間から体は自分でキズを治そうと働きます。傷口にみられる黄色のジクジクした汁がそれで、治す成分がたっぷり含まれた分泌液です。これは密封された状態が一番働きやすく効果を発揮します。だから傷口の湿潤を保ち、乾かさないことが大切で、被覆剤などを使って自分自身の治癒力を最大限に引き出す湿潤治療がキズを上手に治す方法なのです。スポーツや遠足や運動会で子供たちがキズを作ることがありますが、そんな時はまず水道水できれいにキズを洗って、砂ぼこりと一緒にバイ菌も洗い流してください。消毒液の使用は不要です。水で洗うだけでもバイ菌はいなくなります。

その後は料理用のラップでキズを覆うだけ。最初のうちは1日数回、「傷を洗ってはラップを取り替える」を繰り返してください。はじめのうち、傷はジクジクしていますが、次第に分泌液が少なくなり、速ければ5〜6日くらいできれいな皮膚が再生します。とにかく大事なのは、「傷をきれいに洗うこと」「傷を絶対に乾かさないこと」だけ。密封していると当然、汗臭いような匂いがしてきますが、これは心配ありません。洗えばきれいに落ちます。

たったこれだけで信じられないほど簡単に傷が治ってしまいます。

だまされたと思って、ご家庭でも是非試しては・・・。

詳しくはDr. 夏井の創傷治療を見て下さい！

「新しい創傷治療」で検索もできますが、講演内容がダウンロード出来ますので興味のある方も無い方も、ぜひ一度ご覧になる事をおすすめします。　http://www.wound-treatment.jp/ronbun-pdf/slide.htm

（富谷在住　K.N.）